聖　書：コリント人への手紙第二 4：7〜12
説教題：この宝を土の器の中に
日　時：2024 年 11 月 3 日（朝拝）

パウロは今日の 7 節を「私たちは、この宝を土の器の中に入れています」という言葉で始めますが、パウロはまさにこれまで「この宝」についての話をして来ました。この「宝」とは何でしょうか。直前の 6 節の言葉で言えば「キリストの御顔にある神の栄光を知る知識」と言えます。キリストを通して神の素晴らしい栄光を知ることです。そのことを内容とする福音のことです。この福音に示されているキリストを通して、あの旧約のモーセが神と直接語り合い、その顔の肌が神の光を反映して輝いたように、それ以上の祝福に生きることができるという知らせです。この宝を「土の器の中に入れ」と語り、パウロはここからこの宝を持ち運ぶ貧しい者たちの側に焦点を当てて話そうとしています。なぜでしょうか。その背景にはコリントにいた自称大使徒たち存在がありました。彼らはパウロについてこう批判していました。10 章 10 節：「パウロの手紙は重みがあって力強いが、実際に会ってみると弱々しく、話は大したことはない。」　彼らはこのようにパウロを見下していました。手紙を読むと立派な人物を思わせるが、会ってみると大したことはなく、むしろ弱々しい。話しぶりもなっていないし、都会的な洗練さがない。時代に合っていない、時代遅れの話しぶりだと。彼らは一言で言えば勝利主義者、繁栄主義者たちでした。我々はこんなにも立派だ！と外見や、雄弁さや、自分たちの地位を誇示していました。そんな彼らの目には苦しみの中にあるパウロの姿は使徒らしくないもの、神の祝福がないものと映っていました。そんな彼らの主張に対して、パウロはここで神の栄光は人間の弱さを通して示されるということを述べて行くのです。

彼はここで自分たちを指して「土の器」と言います。金属の器などに比べればもろく、弱く、安い器です。壊れたらすぐに捨てられます。このもとにあるのは創世記 2 章 7 節で、人は大地のちりで形造られたと言われていることでしょう。確かに人は土からなるもろく、弱いものです。しかしそれで良いと言われています。ここに「それは、この測り知れない力が神のものであることが明らかになるため」とあります。もし私たちが立派な存在だったらどうでしょう。私たちが何かをなした時、自分を誇ることになってしまいます。自分に栄光を帰そうとするでしょう。それはまさにコリントにいた偽使徒たちがしていたことでした。しかし弱い者が用いられることによって

測り知れない力が神から出ていることが明らかにされます。1 章 8 節以降でパウロは自分が受けた苦難について話しました。非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、生きる望みさえ失うほどで、実際、死刑の宣告を受けた思いだったと。しかしそこから人間の思いをはるかに超える仕方で神は救い出してくださったと彼は述べました。そこに確かに測り知れない力はただ神からのみ出たことが証しされていました。これが神の方式、神の御心であるということです。

8 節と 9 節はパウロの経験に基づく証しでしょう。ここに二つずつ合計 4 つのペアがあります。いずれもパウロが受けたであろう苦しみが先に述べられ、その後で神がくださった救いが述べられます。この手紙の 1 章 5 節でパウロは「私たちにキリストの苦難があふれているように、キリストによって私たちの慰めもあふれているからです」と語っていましたが、まさにその具体例がここにあります。つまり 4 つのペアの前半はパウロたちが受けた「キリストの苦難」に相当し、後半はパウロたちが受けた「慰め」と言えます。

順番に簡単に見て行きたいと思いますが、まず一つ目に「私たちは四方八方から苦しめられますが」と始まります。これは圧迫されているという意味の言葉です。プレッシャーに囲まれているということです。しかし「窮することはありません」と続きます。これは出口がないほど窮屈にされ、押しつぶされるという意味の言葉です。そこまではパウロたちは行かない。必ず出口があって押しつぶされるところまでは行かないと言います。二つ目は「途方に暮れますが」。主が復活された日の朝、女たちは墓でイエス様の体が見当たらず、「途方に暮れた」と書かれています。パウロにも実にそのような時があったのです。あの彼にも途方に暮れて、どうしたら良いかと当惑する時があった。しかし「行き詰まることはありません」とあります。これは原文のギリシャ語では、先の「途方に暮れる」と訳された言葉の強意形ですから、「完全に途方に暮れる」という意味です。つまり途方に暮れますが完全に途方に暮れることはないということです。その極限状態までは行かない。先に触れた 1 章 8 節の苦しみはそうでした。もはや死刑宣告を受けたという絶望に近い状態を味わいました。しかし全くの絶望には至らないように神はしてくださいました。

三つ目は「迫害されますが」。パウロが迫害を受けたことは使徒の働きに色々記されていますし、この手紙にもこの後書かれます。近いところでは 6 章 5 節にむち打ち、

入獄などのことが述べられます。しかし「見捨てられることはありません」と言います。誰に見捨てられないのでしょう。それは神にですね。思い起こすのはイエス様の十字架のお言葉、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という言葉です。イエス様は私たちの罪のために父なる神から見捨てられました。しかしパウロはそこまでは行きません。その手前までで守られていると言います。そして四つ目は「倒されますが」。まさに捕らえられ、投げ飛ばされ、次の瞬間には殺されるかという状況に遭遇したこともありました。しかし「滅びません」と続きます。同じ言葉はこの章の 3 節の「滅び行く人々」に使われていました。そのようにはならないということです。永遠に失われる者となることはないのです。

このようなパウロたちが受けた苦難と慰めはキリストの十字架と復活に基礎づけられているというのが 10〜11 節です。ここに「私たちは、いつもイエスの死を身に帯びています」とあります。これは先の 8〜9 節で見た、四つのペアの内の前半部分を指します。すなわち四方八方から苦しめられ、途方に暮れ、迫害され、倒されるという経験です。イエス様と結ばれている者としてパウロはいつも「イエスの死を身に帯びている」という生活をしていました。しかしそこには目的があるということが 10 節後半に示されます。「それはまた、イエスのいのちが私たちの身に現れるためです」と。イエス様に結ばれている者として、イエス様と同じ「イエスの死を身に帯びる」という道を進む時に、イエス様が勝ち取った復活のいのちの祝福がその人に臨むのです。この祝福に生かされる者となるために先の苦難の道があるのです。

11 節も同じです。「私たち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されています」とあります。「渡される」という表現は、聖書に親しんでいる方ならすぐ思い起こされると思います。これはイエス様が死に渡されるという場合に使われる表現です。誰によって渡されるのでしょうか。それは神によってです。同じように私たちも「死に渡されている」と言われています。これも神によってです。神がそのように導いておられるのです。神はそのようにして私たちがイエス様と同じ道を行くことを御心としておられます。そしてこの道を進む目的として、この節後半に「それはまた、イエスのいのちが私たちの死ぬべき肉体において現れるためです」と前の節と同じことが言われています。私たちの今のからだは死ぬべき肉体であり、7 節にあったように「土の器」です。しかしイエス様に結ばれている者たちとして、イエス様が勝ち取ってくださった「イエスのいのち」と表現される復活の力と祝福が、この世にある時から私

たちを覆ってくれるのです。私たちはそのことをここで体験することができ、その私たちを通して神の光を証しすることができるのです。

最後の 12 節は一見不思議に見えるかもしれません。「こうして、死は私たちのうちに働き、いのちはあなたがたのうちに働いているのです。」　死が私たちの内に働き、いのちも私たちの内に働くとあるなら分かりますが、死は私たちの内に、いのちはあなたがたの内にと言われています。これはパウロたちの苦難をも厭わない奉仕がコリント人たちの救いにつながったということを言っているものです。この手紙の 1 章 6 節で「私たちが苦しみにあうとすれば、それはあなたがたの慰めと救いのためです」とあったのと同じです。主に従うがゆえのパウロたちの苦しみ、犠牲的奉仕を通して、他の者たちが慰めと祝福を受けるに至ったのです。

さて私たちは今日の箇所をどのように読むでしょうか。厳しい内容で、できればさっと読み過ごしてしまいたいと思うでしょうか。あるいはこれはパウロや使徒たち、伝道者たちにだけ当てはまる言葉だと読むでしょうか。しかしそのように読むことはできません。パウロはこの話の続きとして次回 16 節で「私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています」と語ります。またその流れで 5 章 1 節以降で復活のからだについて語ります。確かにパウロは自らの使徒としての弁明のため、これらのことを書いていますから、まず自分のこととして語っていますが、ここにある原則はすべてのクリスチャンにも当てはまるものです。そうでなければ、この後、語られることも私たちに当てはまらないことになってしまいます。

ある人はなぜ信者になお苦しい歩みがあるのかと問うかもしれません。イエス様は私たちの罪の呪いを全部十字架上で受けてくださったのではないかと。確かにその通りです。ではなぜ信者に「イエスの死を身に帯びる」という歩みが求められるのでしょうか。それは私たちの罪の支払いのためではありません。これは私たちがイエス様に似る者となって行くということと関係があります。3 章 18 節に、私たちは主と同じかたちに姿を変えられて行くとありました。そのようにイエス様と結ばれて、イエス様と似た者にされて行くプロセスの重要な一部として「イエスの死を身に帯びる」という歩みがあるのです。イエス様が神の御心に従うことを第一に求めて苦しみの道をも進まれたように、私たちもそのイエス様の足跡に従う歩みをするのです。そこには必ず苦しみもあるのです。

しかしそこには晴らしい慰めが用意されています。8〜9 節に「私たちは四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方に暮れますが、行き詰まることはありません。迫害されますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません」とありました。これは普通のクリスチャンにも当てはまることなのでしょうか。答えはもちろんそうです。先に「見捨てられる」という言葉はイエス様が父なる神に見捨てられたことを思い起こさせる言葉だと申し上げました。それと同様、ここにある 4 つのペアの後半で言われていることは、すべてイエス様が受けてくださったものです。イエス様は窮する状態まで行ってくださいました。完全に途方に暮れる状態まで行ってくださいました。また先に触れた通り、父なる神に見捨てられました。そして滅びる、すなわち完全な死を味わう状態に置かれました。本来私たちが受けるにふさわしいこれらの苦しみをイエス様は全部ご自分の身に受けて贖いを成し遂げ、いのちに復活されました。ですから私たちはそこまで行くことがないように守られているのです。やがての将来にこの完全な祝福にあずかりますが、それだけではなく、今この世にある時から、イエス様と同じ苦しみの道を行くことにおいて、この慰めをも味わい、それに守られながら生きることができるのです。自らは弱い土の器ですが、このキリストにある神の測り知れない恵みと力に支えられながら日々を歩むことができるのです。私たちがそのように福音の恵みを体現して生きることとセットで、福音はより力強く宣べ伝えられて行くというのが神の定めた方法です。そしてこのように主に従って歩む人は他の人の救いと祝福のために喜んで犠牲を払う人となることでしょう。12 節はそのことを述べているものです。実際私たちがこうして今日、福音を信じるいのちの祝福にあずかっている背後には、まさに「イエスのために死に渡される」奉仕をささげてくださった方がいたからではないでしょうか。この日本にもいのちがけで福音を伝えてくださった宣教師たちがいたことを覚えます。とするなら私たちもそのようなイエス様に倣う自分の犠牲的奉仕なしに人々に福音を伝えられるかのように思ってはならないということになります。周りの方々のため、私たちも主に倣って「イエスの死を身に帯びている」という生き方をする必要があるのではないでしょうか。そうしてこそ 12 節にあるように、「死は私に働き、いのちはあなたがたに働く」という御言葉を現実のものとして私たちも体験するように導かれるのではないでしょうか。

神は私たちをキリストに結び合わせ、キリストに似る者となる歩みを導いてくださ

っています。そこには「キリストの苦難」と呼ばれる道もあります。しかしその道を進む時に、8〜9 節で見た素晴らしい慰めを知る者としていただけます。弱い状態にありながら、死ぬべき肉体を持っているこの世の歩みにおいても、キリストの十字架と復活に基づいて、この大いなる慰めを味わい知って歩むことができます。その歩みをもって、素晴らしい宝を持ち運ぶ土の器の栄光に生きるようにと神は今日も私たち一人一人を召してくださっています。